

塗魂 もくじ

プロローグ

I

第1章 ● 在日と七三と発進と

13

第2章 ● 自殺未遂と交通事故

51

第3章 ● 元暴走族と難病の女

83

第4章 ● ペンキ屋なんてくそじゃないか

115

第5章 ● 口ひげのふたり

149

第6章 ● 白いペンキは、魔法の塗料

179

第7章 ● デコピン、逃避行……愛すべき面々

199

最終章 ● なぜ彼らはハワイに行ったのか

219

エピソード

239

## プロローグ

二〇一五年十一月。常夏のハワイ。その日は、朝の雨がうそのように、青い空が広がった。とある高校の校舎のよこに、六〇人ほどの集団がいた。白い服を着ている。道をゆくハワイの人たちは思った。

〈この連中は、何かの宗教団体の集まりだろうか〉

連中の顔を見た。白人はひとりもない。黒人もいない。みんな東洋人のようだ。

〈この連中、これから何をしようとしているんだ？〉

連中は、それぞれ、何か持っている。ころころ転がすローラーのようだ。

何かの缶が、そこらじゅうにある。

この連中、その缶を開けはじめた。中に入っているのは……、白いペンキだ。

連中は、ころころローラーを缶の中に入れて、ペンキをつけはじめた。

そして、校舎の壁に塗りはじめた。手慣れている、なかなか上手である。

へやるな、こいつら。ただものじゃあなさそうだな

おーっと、連中は、はしごを壁にたてかけて屋根に上がっていくぞ。ひよいひよいつと、身軽だ。そして、屋根にも白いペンキを塗りはじめた。

連中は、みんな真剣な顔、でも、ときおり笑顔で会話をしている。

耳をすませてみる。英語ではない。なら、どこの言葉だ？

ハワイでは、ときどき聞く言葉だ。わかつたぞ。おそらく、あの国の言葉だ。

白い集団が、白いペンキを高校に塗っている。目的は何なんだ？

連中のひとりに聞いてみよう。

「キャン ユー スピーク イングリッシュ？（英語を話せますか）」

「ア リトル（少しだけ）」

片言の英語なら大丈夫なようだ。

では、続いて聞いてみよう。

「ホエア アー ユー フロム？（どこから来たの？）」

「ジャパン」

やっぱりそうだ。この連中は、ニッポンから来たんだ。

ニッポンというと……。やはりトウキョウからだろうか。

「トウキョウ？」

連中の中には、イエスと答えたのもいる。でも、多くがノーと答えた。

ひとりは、オオサカ、と言った。聞いたことある地名だ。

ひとりは、イセハラ、と言った。ヒラツカ、というヤツ、タテヤマというヤツ……。どこなんだ、それ？

ニッポン、ニッポンといっても、いささか広うござんす、ということなのだろう。そのどこからかという、実は、あっちこっちから集合した、ということなのだろう。

日本人はハワイが好きだ。一年中、日本人が来る。ハッピーニューイヤールのころなんか、休暇を楽しむ芸能人が押し寄せる。

この白い連中も観光に来たのだろうか。いや待てよ、観光なら、ビーチを散策するとか、シヨップングセンターを歩いているはずだ。

この連中、何をしているんだろうか。聞いてみよう。

「ホワット アー ユー ドゥーイング？（何してるの？）」

ペンキを塗っている、に決まっている、見れば分かる。ところが、想定外の答えが返ってきた。

「ボランティア」

ペンキ塗りのボランティア？ 何だ、それ。

連中の中に、少し英語が分かるヤツがいた。

ヤツによると、その白いペンキは、塗るとギンギラ太陽の熱をはねかえして部屋の中は暑くならない、そんな不思議なペンキなのだとか。なんでも、宇宙ロケットにもつかわれている塗料の技術を応用してつくったペンキ、なのだとか。

このペンキをつくったのは、トウキョウのイタバシとかいう場所にある、小さな会社なのだとか。そのペンキは、いまや世界から引っぱりだこなんだ、とか。

ジャスト ア モーメント（ちよつと待って）。ボランティアということは、ただで塗っているということだよな。

もしかしたら、連中は、ハワイに来る飛行機代、ホテル代、そして、ペンキ代など、ゼーブンぶ自腹なのだろうか？

伊達や酔狂でできることじゃない。この連中、大金持ちにはとても見えない。むしろ、汗水たらして日々を送っているだろう。

ここは、聞いてみるしかない。

「ホワット ユア ジョブ？（仕事は何ですか）」

彼らは、声をあわせた。

「ウイーアー ペインターズ！（私たちは、ペンキ屋です）」

ペンキ塗りのプロフェッショナルたちが、日本の各地からハワイに、自腹でやって来て、プロの技を惜しみなく発揮してボランティアをしている。そういうことなの？



この白い連中、実は、ペンキ屋の社長たち、または、個人事業主である。つまり、一国の主、である。

ペンキ屋という職業。

それは、世の中を支える緑の下の力もち、の仕事である。

赤、青、緑、……。

建物の壁、看板は、さまざまな色のペンキで彩られている。そんな色があふれる街を歩くのは、楽しく、心がおどる。

そして、カラフルな街から感じるのは、人間の温かい気持ち、そして、希望である。

あなたは、この世界のどこかの、とある町が色を失って白と黒だけになってしまったら、と考えたことがあるだろうか。

そう問われて、思うかもしれない。

「そんなこと、ありえない」「白黒映画じゃあるまいし」。

いいえ、現実にあるんだ。みなさんも知っているはずだ。

人間の愚かさが、そうさせてしまうのだ。

人間同士の殺し合い、つまり戦争や内戦、テロが、そうさせてしまうのだ。

廃墟になってしまった街。

そこは、人間の温かい気持ちを奪い、希望を絶望に変えてしまう。憎しみを生む。そんな寒々しい色を失った白黒の世界を、あなたは映像で見たことがあるはずだ。

それだけではない。街を白黒にしてしまうことが、もうひとつある。



それは、あらがうことのできない自然の力だ。

たとえば、阪神大震災であり、東日本大震災である。そして、熊本大震災である。

大地震で、大津波で、火事で、街にあった建物は、がれきと化した。街から色が奪われた。そこにもやはり、絶望があふれた。

でも……。

時が流れる。廃墟と化した街に、建物がたつ、看板がでる。

茶、ピンク、黄色……。

ペンキ屋たちが、心をこめて、一塗り一塗り。

彩られていく街。人々の心は、絶望から希望へと向かう。

ペンキ屋は、人々を希望へといざなう、すばらしい仕事なのである。

なのに、残念なことだけれど……。

日本という格差の国では、いつも下に見られている。ペンキ屋たちは、こんな風な言葉を何度も浴びせられている。

「あなた、ペンキまみれね、近寄らないでちょうだい」

「なんなの、そのダボダボファッションは。不良の集まりね、ああいやだ」

読者のみなさんは、そんな風に思ったことはないだろうか。いや、職人の世界を知らない人なら、あるはずだ。



たとえば、あるペンキ屋の男の日々は、こうである。

朝から汗にまみれて仕事をしてきた。ありったけの技術で、ていねいにていねいに、ひと塗りひと塗りしてきた。

昼の休憩に入る。おしゃれなレストランの前には、ランチタイムのメニューが描かれた看板が置かれている。うまそうだなあ。

でも、おれはペンキで汚れた作業着姿。これじゃあ、店には入れないなあ。

近ごろは、立ち食いそば屋も、きれいになってしまった。そば屋も、おれを拒否しはじめたのか。行く店、ないなあ。

近くのコンビニで弁当買って、作業現場で食べる。雨の日は、車の運転席での昼飯だ。

本当は、おしゃれなレストランにも、そば屋にも、節度をもって入ればいい。きっと、店の

人が入店拒否することはないはずだ。そんなこと、分かっているんだ。

でも……。

踏み切れない自分がいる。心が卑屈になっている自分がいる。

子どもを思い出す。

大人たちは言っていた。「いい学校をでて、いい会社に就職する。それがしあわせだ」と。自分が大人になって、思う。

世の中から見れば、ペンキ屋をしているようなヤツは落ちこぼれにしか映っていないんだろ  
うなあ、と。

確かに、おれは、学校にもまともに行かなかった。でもいま、ビルを家を、街を、カラフル  
にしようと頑張っているんだ。

ことしは暖冬だった、とか言っている人がいる。冗談じゃない。凍えるほど寒いんだ。

暖冬とかいっている人は、昼間、ビルの中でぬくぬくと過ごしているのだろう。政治家さん  
とか官僚さん、エリート会社員さんたちだろう。

あの人たちは、おれとは別世界に住んでいる。政治家さんたちなんて、おれたちのことなど  
視野の外だろうな。

ペンキ塗りの仕事は、好きだ。やりがいもある、自分が塗ったものが世の中に残るんだから。でも……。ちくしょう。やりきれねえ。

ハワイでボランティアをしていた、この白い連中。

この連中には、高校生のころ、理不尽なことをした非道な教師に暴力で反抗してしまい、学校を追われた男がいる。悪いのは、その教師だ。でも、大人っていうヤツは、世間っていうヤツは、立場の弱い者を切り捨てていく。

この連中の中には、非行に走ってしまった男がいる。でも、多かれ少なかれ、男だろうが女だろうが、ヤンキーの世界にあこがれるもの。少しだけいきすぎってしまっただけだ。計算高いエリートらに比べたら、純情なだけである。

代金の不払いをされた男がいる。ありったけの腕をふるって仕事をしたのに。

ひたすら客のために頑張ったら、迷惑なんだよ、と逆ギレされた男がいる。

おれたちペンキ屋は、社会の最下層にいるということなんだな。

社会から見下されなきゃあ、ならないんだな。

ふつう、そう悟ってしまった人間たちは、社会への不満と反発、そればかりを抱いてしまうものである。それを爆発させずに心にとどめ、ギャンブルや酒で何とか、ごまかすものである。



ところが……。

そんな連中が、二〇一五年の十一月、ハワイでボランティアをしているのである。

この連中、実は日本中で、ペンキ塗りのボランティアをしている。

東日本大震災に襲われてしまった街で、川の決壊にあった街で。廃校が決まって予算がない小学校で。障がいがある子どもたちがいる学校で。

財政が破綻してしまった北海道の夕張市で。原爆の地である広島で、長崎で……。

東に困っている人がいれば、行ってペンキを塗り、「大丈夫ですよ」と言い、西に泣いている人がいれば、行ってペンキを塗り、「負けないで」と言う。

宮沢賢治の『雨ニモ負ケズ』を、ペンキ屋たちが実行しているのである。

ハワイで塗っている白いペンキも、塗っている。

赤、黄、ピンク、緑……。さまざまな色のペンキも塗っている。

連中のボランティア活動は、もちろん現在進行形！

魂をこめてペンキ塗りのボランテίαをする。だから連中は、自分たちを、こう呼ぶ。

「塗魂<sup>トイコシ</sup>ペインターズ」

その連中たちがたどってきた半生のドラマを余すことなくつづる、それがこの本である。

そして、なぜ連中がボランテίαをしているのかを解き明かす、それがこの本である。

さらに、なぜ連中が、わざわざハワイにまでボランテίαに行ったのか。その答えをひもとくのが、この本である。

まずは、愛知県の春日井市、そして、東京の池袋で、ペンキ屋の社長をしている男ふたり、それぞれのドラマからはじめなければなるまい。このふたりがいなければ、塗魂ペインターズは誕生しなかったのだから。

[ 著 者 ]

**中 島 隆** (なかじま・たかし)

1963年生まれ。朝日新聞の編集委員で、中小企業の応援団長を自称している。著書に『魂の中小企業』（朝日新聞出版、2009年）、『女性社員にまかせたら、ヒット商品できちゃった——ベビーフット、ミリオンセラーの秘密』（あさ出版、2014年）。

## 塗 魂

2016年8月10日 初版第一刷印刷

2016年8月25日 初版第一刷発行

著 者 中 島 隆

発行者 森下紀夫

発行所 論 創 社

東京都千代田区神田神保町2-23

北井ビル

tel. 03-3264-5254

fax. 03-3264-5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替 00160-1-155266

組版 永井佳乃

装幀 奥定泰之

印刷・製本 中央精版印刷

©The Asahi Shinbun Company 2016 Printed in Japan.

ISBN978-4-8460-1560-2

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。